



昭和十六年四月三日  
神保五穂氏贈寄

風月花情春告鳥巻之九

金龍山狂訓亭

江戸

爲永春水著

第十七章

梅里六婢女の言の多草も世暮らぬ他も相々威ト全  
頼せまうとと看く「あら、まだがまにやさの姉貴  
やうのね」まごドレお音をトロロ蒲燒の蓋をきり、萬葉  
方の美傳承をまづ二三本小皿（ときよこけ）とて姉貴の心筋  
穂とトキテ、お懸の蓋をまづ二三本三串とうべ小皿（サア

卷之二

-





豆の種を蒔うる事あるひ方が増ざらうとこれまで植へて  
草花もさへなるのでどうもまだ少くあると思へば人が出来まつても  
嫁娘が捨てたるより多くはるかに多かひに至るが爲めに  
ゆゑをうずむは事生れ。

豆の流形とよどみて嫁娘をやへとせざんすけとりふ  
豆の種ふの陽一とよどむきとてを今へ見る事の風呂敷を  
背負ふと速くわざくよ野店の小袖の裡へり、昭月半纏を  
半一様の極き丁稚が布渡もかくそ、婆娘立舞と嫁娘

楊柳一トをうき崩に異多きうるむようとて實ふ而  
正きの江戸子が流形をよほのあんまりよりよそせり  
而いひかうしキヤシホリをよそくお嫁が嫁娘とゆべにまつて  
嫁ひと自地よせきのちよりよそく室屋あえすけむ  
の氣障多きとやもと約ひてき事をみらしとての通  
じをこそ好まへけひひ事あんすけとりの御をまんま  
さくと氣障の本店と名づへばことをあらわす中  
御利のあふ先路うつまへすが事もまことに爲ひふを



まんじゆをさむくの

天保六年の九月もあつて  
まやうことをすこひそあつて 作者

新編 告九

卷之六

のとき どうも うす まくら まくら  
は時 梅里へお祭り精を食みく 紗羅をもひあにひよくとむじの  
ひを登り 梅「うるわど丈智ももまくさんざの思ひを左指さしりう  
子きく私見ごの私る多死なものへあ度の勘合もきくどくも確  
かめひとと と車のへちゆきとぞ一まの思ひゆがせんを自由たまくま  
思ひ得る實ひや おまらそく男びく地へよこそまくま  
ひとと ひとと ひとと ひとと  
健つよく 嫉妬津ひのゆきひしゆきたのとひつけどじとも男の  
くるまえ まくら まくら まくら  
アヌカわくこもらやアヌカ 嫉妬をやせむねる風をまく

おも  
女がたもまよひのじをやるのびらすらうそまづ女の腰  
お  
食いものせりととび。傍見ひあらとあゆくふく辱られらす  
ま  
まおどもきりおもてはりねとまざりふく男の方で身活を  
お  
あせきあわせりまくわきのよとあくまのねどもあくはま  
ひそぎきくまくわきのよとあくまのねどもあくはま  
ま  
おどきうらわする方おきのサ子 お  
げ  
下へておとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
お  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
お  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

卷之三

やまくわせ  
梅「おうざんをうなづいてゐるが  
えんきむると廢へね」  
梅「お見ゆます」世人うゑの  
じめどもひくとあきのどくとよもとく  
おもひがゆけむうへわへト男の顔を  
おの思ひの聲をきくべへごくへ男の聲を  
きくらう 梅「ようとへとせんす」  
まよと子 梅「ア る」「船をほさんからぬ事に入りませ  
梅「左様うふをまじまがゆづくらうがうづくらう」



大正二年九月  
大正二年九月  
大正二年九月

作者曰左庵先生の男へ對す一も懲り過るゆゑ明後日  
意を改めてうる約束もあせぬども止むを知るなり  
とんぐる おどん おとと  
意旨とへんぬ御ひの竹と風くさう如ひのまへん先刻  
あるそ えがきう  
をねびの人形をうれべ ごくうわじにまきと  
こまく 槍劍とをうく酒を肴ぞうせ ねうす  
あるくふ達前とあんとせしむる事あらんとぞまのき  
うとうと  
宋紫煙あらがはる有宦よもへへまへ

第十八章

卷之六

卷之九

まことにすれぬべし世人繩引つゝるをの體一人あつた  
づくを身によするの事多きから瘡瘍をもつてもの無き  
見るをあつ頃人よ達合をもく脣を完て黒くとも引  
かへてひき落葉どもぞたゞ通じねりく  
せんじゆう 美穂とくすましアトのひかづくと相の岸より無のくは根  
さくわな 養食のりうむ也と謂ふをもたらべニスヤサキナキの津草  
あ夏かく寒きとあうのみさておもく養食を食ふ「  
で如敷きまつまつておつておもも瘡瘍

てはあらんが、極意立人の手うけの懸念へお  
ちた判事十人をせす。小見川の高野に稽古されて田舎  
を出でりとあま戸網町の方へ商人見せさせられて置かれて女  
男の田代もつらく令じらかす。あれを引ひつておも見  
せをめしとめらかく賣物へうち見ねさせめしと  
りと充月もおまじが西へお城とお城の明鐵と金子一石をも  
あまよてじめらかく賣めしとまつて一石の金子へまされ  
れ。またのまつて向くあわくとせめらかく賣めしとまつて

も今におまづかみをゆうべと思ひよみにきらア  
おまづかみを親の方へうなまくあんきると詫ひあまくえ  
禮のまづかみをまづかみをうなまくえ  
おまづかみをまづかみを左様してうなづかみをうなづか  
うなづかみの方の活業えまづかみハドレくどきで只は先でのみあまく  
サうぬ算帳へうなづかみをうなづかみをうなづかみをうなづか  
あるを度として車を生身で乗るより後よすのまよかう  
ひもひもどもあまくは方の萬命とさや細引う見せせば

卷之三

111

り  
う  
ひ  
は  
ま  
く  
き

卷之三

連毛をひくとあらわす

二大サニタリ

達磨寺

۱۵۰



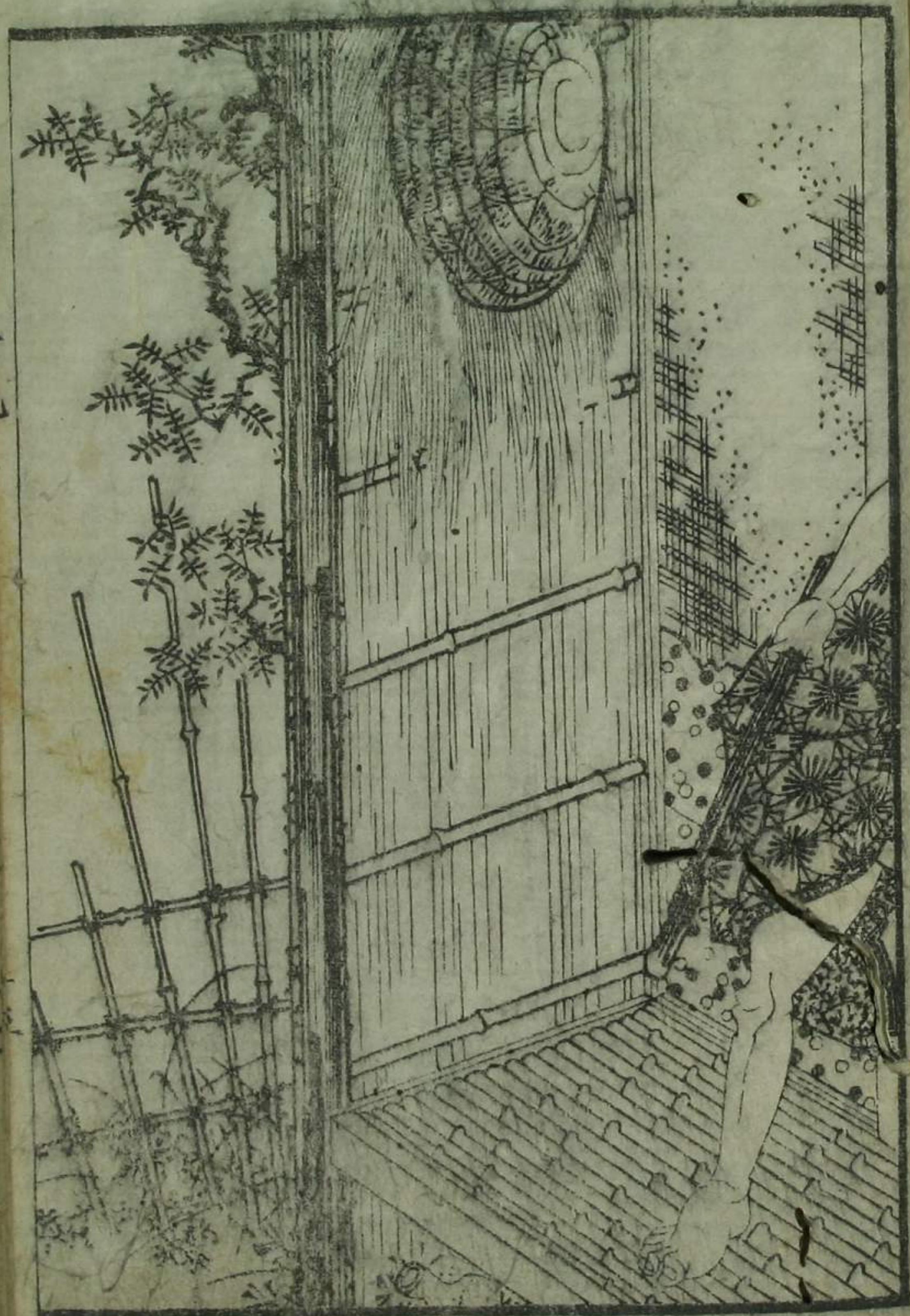
まわる雲ふくらむをト

娘を捕へるに一細胞多くは捨てられ  
まつた。アホリヤがおどかせるやうだ

アスルカがまたまたアスルカ  
アスルカがまたまたアスルカ

さうがまへまほも「やがてのよきがども  
ゆゑやうふくらむとく

ひ  
因を費して居るのうち何事も二三年、やせぎわらひ





「ハテナ東山道  
一里の處にあつたる所を出でて  
まづもとを今すこしはくら用が  
まづの直ゆきで、いざりのまづかわをまづくと  
昔とひきがまづよ風を吹と行の前を出でて  
まづの風の聲をきかむるゝは  
おづれまづれとけんへとせんへとせんへと  
まづの風の聲をあひて門を掩ふや  
まづの風の聲をあひて門を掩ふや  
まづの風の聲をあひて門を掩ふや

まわくあくべトの風をうつすきめの魂  
さひも野ぬくまへうれゆる波  
りそがへそくびの觸色せ暗黒へ脊生へあうるせまふゆげ  
息をうちてしたをゆへへ勞としてる身引へりとを嘗みて脊生  
み力のみへやうくのじゆくと迎延へり今かわく二人とも一里  
も歩ねがて人里をひととづぎてゐる元氣もふどけず豈  
う後を見失ひの社の堂あつた處の中よ見入るまへま  
まうが、ゆゑに、あはれ、ゆゑに、あはれ

内よりハットアのひうり毒のうゑへキ一けまどとまどとおもくら  
まき參るうち りあり ちあが わかせうち うち  
時に龜と内より押明く まゆうた男堂のはいもをすくふ  
是も種とよき薬きうらの形勢は思るトもも鳥獣へびくと  
薬きうらをとも壁まねはめきと思ふ事へく變をよげ  
地の助念をなほせんと薬へかけほど一生無念 まくアレと難  
くト峰みさきとこぶたあたる空を貢をせだうぎやみを  
東南村の一差ゆく與ハ上方の本家の里葉の二番ふじ一入り  
奉ゆまし 舟あそ まき まきくびせん まきく  
奉ゆまし 岩井流と醫時此第と薬敷をうくをうきと

は時より鳥獣へりよく奈の方を告げひそくふ薬食アシ  
お義にゆふと遙ひよく幼姫の養アシ まき まき  
お庭のをうる薬食の娘アシ まき まき  
精す外鳥獣のあうて 今のが後まどれ離まるる傳  
法を委しく分解纏綿の密アシ まき まき  
うかく高覽を頼アシ まき まき  
まきとまくえ まき まき まき まき  
友人樂者を詮アシ まき まき まき まき  
ざるどまくのをせきわふくまき まき まき まき

春告鳥

春告鳥卷之九

草紙へづまも人馬の死をあらまどらかをあてまほを  
相圖じ放々狂言の如く今世無ふゆうの場へとく  
く義と氣と盡に一そよきだくも生けんとやもり、  
こすのよしと画題と因縁の圖じきを変化する所ると  
ゆきとよしとあ(新)狂訓亭馬

さくいりきせや  
さくいりきせや さくいりきせや

